

〔1〕 研究目的

動物園でのゾウ保全のためのプログラム開発として、観察視点を採り入れた子どもも参加できる教材の作成

[2] 研究の内容・方法

これまでの作成したツールをもとに、参加者の意見を取り入れ、現地調査を含めて「観察シート」「解説シート」「持ち帰りメッセージシート」を作成した。

具体的には、2019年までに使用していた動物園での「ゾウ保全プログラム」を見直し、

- ①対面型で使用する観察ツールと大勢の来園者に伝えることのきる情報ツールの役割の明確化
- ②他の保全教育団体の実践からも学び、ESDを意識した取り組みには現地での活動グループと連携する手立てを見つける
- ③効果的なツールの検証を目指す を行った。

コロナ禍のもと、実際に動物園での活動が制限をされていたため、サポーターの育成の観点から現地保全団体の活動をしている団体「サザンクロス」より保全教育におけるメッセージ性についてアフリカでの活動情報を交えて講演をいただく。

### [3] 結論・考察

#### ①と③について

- ・対象は家族連れ（年齢構成が大人と3歳から10歳くらい）を想定
- ・書き込むタイプは、目当てとなる絵があることが重要
- ・自分がみたことを振り返ることのできるもの
- ・観察シートを学習ツールにするためのしくみは、自分の観察結果を、ゾウ本来の行動と関連づけることである
- ・「ふりかえり」には、大人が何らかの資料に基づいて語ってあげられることが重要

#### ②について

長年、海外での保全事業と教育に携わる団体から、教育ツール開発に至る事業展開を学ため、ShoeZメンバーが知人を介して、学ぶための講師を依頼した。テーマは「その地における保全の課題」「その地との関係作り」「日本人ができること」等について講演をお願いし、とくに子どもを対象としたESDについて意見をいただいた。

対象は ShoeZメンバーとサポーター

実施日と参加人数は

2020年10月17日 参加人数 9名

(対面での講演とリモート講演を組み合わせるハイブリッド)

講師は「サザンクロス」の代表 橋詰二三夫氏

その結果、以下のことが成果として得られた。

- ①学習ツールの位置づけは、「よりよい学習ツールが環境教育の要になる」点
- ②学習成果を分かち合える他団体との協力関係構築は、その後の両者の教育活動に活かせる
- ③保全教育プログラムにおける評価ポイントでは、「野生での状況と動物園等の人工飼育下での観察事実とをどうつなげて野生動物理解につなげるかがキーである」ことが講演とディスカッションにより明らかとなった。